

# 論文審査の要旨及び担当者

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	常吉 由佳里
論文審査担当者	主 査	眼科学	坪 田 一 男	
耳鼻咽喉科学	小 川 郁		放射線医学	陣 崎 雅 弘
内科学	中 原 仁			
学力確認担当者：			審査委員長：小川 郁	
			試問日：平成30年 7月10日	
<b>( 論 文 審 査 の 要 旨 )</b>				
論文題名：Importance of Accommodation and Eye Dominance for Measuring Objective Refractions (他覚屈折力測定における調節と眼優位性の重要性)				
<p>本研究では、健常成人を対象に、従来型と両眼開放型のレフラクトメーターの測定値の差に影響する因子を探索した。従来型では器械近視により両眼開放型よりも近視よりの値となるが、その差は加齢により調節力が衰えるほど小さくなること、また、調節力があり、近見斜位角が大きい場合、非優位眼では従来型が両眼開放型と比べ大きく近視よりの差を生じることを明らかにし、両眼開放視での屈折評価の重要性を示した。</p> <p>審査では、調節力の有無のカットオフ値を3Dとした根拠について問われた。3Dは近方作業距離として実臨床で用いられている距離に対応するために採用したと回答された。次に、測定値の差と調節力との相関が見られなかった理由を問われた。調節力として最大調節幅を測定することが望ましかったが、可能な機器が無かったため、遠見時と近見時の両眼開放型レフラクトメーターの測定値の差を調節力として用いており、眼優位性等の影響を受けたデータになっている為に有意な相関の検出に至らなかったと考えられると回答された。次に、本研究の臨床的意義について問われた。現在の臨床では、屈折矯正の際、片眼、閉鎖空間の環境で測定されたデータに基づいて治療が行われているが、そのデータが日常的な両眼開放視下での屈折値と大きく乖離しているケースがあることが初めて示されたことは、実臨床での両眼開放視下での屈折値評価の重要性を示したと回答された。これに対して、臨床的意義を更に裏付けるため、患者自覚へ及ぼす影響の評価が今後期待されると発言された。次に、両眼視と単眼視による差を単純に比較するには、両眼開放型レフラクトメーターで、両眼視と片眼遮蔽下で測定したデータを比較することが有効ではないかと問われた。片眼遮蔽による調節の影響に注意を要するものの、今後検討されるべきと回答された。次に、斜位を有する割合やその程度、年齢による変化は既知の知見があるのかどうか問われた。斜位に関する十分な疫学的データはないことが回答され、今後の検討が待たれると発言された。次に、対象者を矯正視力1.0以上に限った理由について問われた。矯正視力が1.0に満たない場合、眼疾患を有している可能性が高いため除外したと回答された。次に、今日まで両眼視と単眼視の差についての研究がなく、片眼での検査が行われてきた理由について問われた。両眼開放下で検査することが技術的に難しかったことが、従来片眼で検査が行われてきた理由と考えられ、片眼での屈折値と両眼開放下での屈折値が違う場合があることは経験的に知られており、実臨床では矯正量の決定の際に最終的に両眼開放下で患者の自覚を聞きながら微調整することがあると回答された。</p> <p>以上、本研究には検討すべき課題が残されているものの、屈折値評価における両眼視下での評価の重要性を初めて明らかにした点において、有意義な研究であると評価された。</p>				